

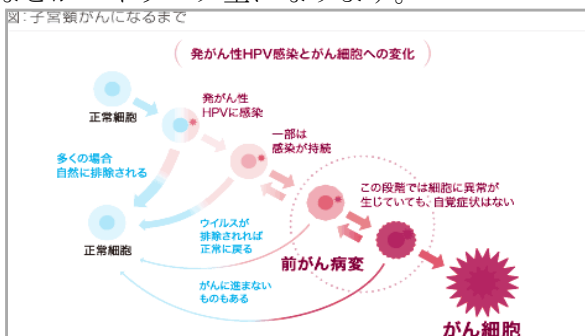
当院でも行っています いま、話題の薬：子宮頸がん予防ワクチン

小林浩一（産婦人科部長）

子宮頸がんの原因はウイルス感染

子宮頸部のがんは一部の例外を除き、ヒトパピローマウイルス（HPV）感染を契機として起こると考えられています。HPVは100種類以上が知られており、がんとの関連の深さを基にハイリスク型 HPV とローリスク型 HPV とに分類されます。良性腫瘍である性器コンジローマの原因とされる HPV6 や 11 などがローリスク型に、子宮頸がんの原因とされる HPV16 や 18 などがハイリスク型になります。

図：子宮頸がんになるまで



HPVは通常性交渉で感染しますが、非常にありふれたもので性交経験のある女性の約80%は一生に一度はハイリスク型 HPV に感染するといわれています。ただし、感染した方がすべてがんになるわけではなく、多くは不顕性感染のまま免疫によって排除されると考えられています。一部の症例では感染が消失せず、さらにそのうちの一部が、がんに進展すると考えられています。

子宮頸がんワクチンとは？

今回わが国ではじめて使用可能となった子宮頸がん予防ワクチンであるサーバリックスは、HPV16 と 18 をターゲットにしています。欧米では HPV6 と 11 もターゲットとしたワクチンが Gardasil という薬品名で使用可能となっており、わが国でも近く使用可能となると考えられています。二つのワクチンの臨床成績や効果、副作用に関しては大きな差はみられず、ほぼ同等の有効性と評価されています。これらのワクチンは、各回 0.5ml を 3 回肩の筋肉に注射しま

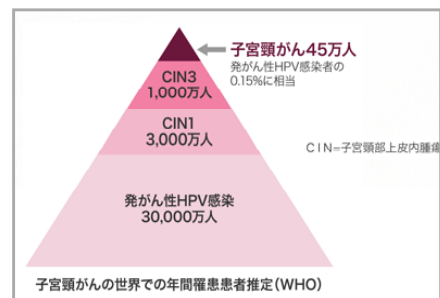
す（サーバリックスは初回接種、1ヵ月後と6ヵ月後に再接種）。ワクチン接種により、自然感染で得られる抗体価の数十倍の抗体が産生され、最低7年間維持されます。サーバリックスでは、3回接種により理論上自然感染時と比較して十分に高い抗体価が20年以上維持されると推計されています。



このワクチンは、予防ワクチンであり、既に感染している HPV に関して治療効果はありません。初交前に接種するのが最も有効とされており、世界的には11～13歳での接種が推奨されています。有用性は減少するものの初交後と考えられる年齢の女性に対しても Catch up（追いかけて）接種が推奨されています。ただし、HPV ワクチンを接種した場合でも子宮頸がん検診は必ず受診すべきです。ワクチンは検診の代わりにはなりません。

今はまだ、私費診療となります

HPV ワクチンは、わが国では現在までのところ保険はきかず、私費診療となります。当院では、ワクチンの注射1回あたりの料金は18,900円（消費税込み）、3回の注射では56,700円となります。ワクチンの注射をご希望になる場合、私費診療となりますので、私費診療用のカルテを作る必要があります。わが国では混合診療が禁止されており、保険診療と私費診療を同日に行うことはできません。ワクチンの注射を行う場合は子宮がん検診など、保険診療とは別の日に私費診療のみを行うために来院していただく必要があります。面倒をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。



（図は allwemen.jp より）